

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04932

研究課題名(和文) 発達障害圏大学生を対象とした修学不適應予防プログラムの開発

研究課題名(英文) developments of programs for students with developmental disorder to protect inadjustment

研究代表者

古橋 裕子 (Furuhashi, Yuko)

静岡大学・保健センター・教授

研究者番号：40377726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害圏大学生は、こだわりや不注意、実行機能等の問題から比較的家庭や学校で保護的に過ごしている高校までと比較して自律的に行動することを要求される大学で不適應を起こしやすい。本研究では大学入学後に発達障害の特性が顕著となり不適應をきたした大学生に対して認知行動療法の技法をベースとした小人数から構成されるグループワークを実施し、抑うつ感、不安感の改善について有効であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年発達障害圏大学生の修学支援の必要性が指摘されている。発達障害とは生まれつき認知やコミュニケーション、社会性、学習、注意力等の能力に偏りや問題を生じ、現実生活に困難をきたす障害を指す。発達障害圏大学生は大学入学後環境や周囲の対応の変化に対し、適応上の問題を呈し、引きこもり等をきたす事例は少なく、うつ病等の二次障害につながるものが指摘されている。

キャンパスにおける発達障害圏の学生支援はまだまだ試行錯誤の中で行われ、体系的介入手法は構築されていない。大学入学後に修学上不適應状態を呈した発達障害圏大学生に体系的介入手法を開発することで、より効率的に支援を行えるため社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：Developmental disorders include autism spectrum disorder, attention deficit hyperactivity disorder, and learning disorder. This study aimed to examine the effectiveness of small size group therapy, which was designed to enhance university-related behavior, in Japanese university students with developmental disorders. The participants included 8 students with developmental disorders. A single-group, pre-post-intervention design was implemented in the study. The results showed significant post intervention improvements in depressive symptom, anxiety, and self-esteem, indicating that the small group therapy was effective for students with developmental disorders.

研究分野：精神医学

キーワード：発達障害 大学生 修学支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年大学は全入学時代を迎え、学生の多様化が指摘され特に発達障害圏学生の支援の必要が指摘されている。発達障害とは生まれつき認知やコミュニケーション、社会性、学習、注意力等の能力に偏りや問題を生じ、現実生活に困難をきたす障害を指す。発達障害の下位分類には自閉症スペクトラム障害 (ASD)、注意欠陥多動性障害 (ADHD)、学習障害 (LD) がある。平成 14 年度の文科省の調査では通常の学級において約 6 % の割合で自閉症スペクトラム障害の児童が在籍している可能性が報告され、大学でも同様の割合の自閉症スペクトラム障害圏学生が存在している可能性が示唆されている。しかし現在のところ学生本人が発達障害の診断を受け、障害受容を経て大学に入学するケースはまれ (西村、2006) で、青年期・成人期になって環境や周囲の対応の変化に対し、適応上の問題を呈し、引きこもりや適応水準の低下をきたす事例は少なくない。しかも青年期以降に対人関係上の問題や不適応を経験することにより自己評価が低下し、うつ状態等の二次障害につながるものが指摘されている。

他方、発達障害者支援法及び障害者差別解消法により、大学においても発達障害圏学生への支援や合理的配慮の提供が必要になったが、キャンパスにおける発達障害圏の学生支援はまだまだ試行錯誤の中で行われ、体系的介入手法は構築されていない。

2. 研究の目的

発達障害圏学生に対しては、現在個別の対応が中心ではあるが、他者とかかわる場ができることが心理的な安定をうみ、現実的な取り組みを可能にすると指摘されている (熊谷・辻井、2005)。これまで精神科医として東京都教職員互助会三楽病院でメンタル不全教員の職場復帰訓練、東京都中部総合精神福祉センターで精神障害者のデイケアおよび「ひきこもり」や「家庭内暴力」を呈している中学・高校生を対象とした思春期デイケア、国立精神神経センターにおいては精神障害者対象のデイ・ナイトケア、静岡大学保健センターで発達障害圏学生の支援に携わり、以下の知見を得た。

思春期においてはグループでの治療的介入が社会適応において個別治療より効果的であったこと (古橋ら、九州神精誌 2005)

教員の不適応に対してもより職場に近い状況で訓練すること (模擬授業の実施など) は職場復帰に効果的であったなど、当事者の周囲環境に即した形で治療を行った方が効果的であること、ソーシャルスキルトレーニング・アサーショントレーニングは一定の効果を得やすいこと、

集団認知行動療法は ASD 圏学生にも有効であること等である。

これらの結果は第 17 回 World Congress of International Association for Child and Adolescent Psychiatry (Melbourne, 2006)、第 13 回 International Congress of European Society for Child and Adolescent Psychiatry (Florence, 2007)、第 3 回 International Conference on Psychosocial Factors at Work (Quebec, 2008)、第 20 回 European Congress of Psychiatry (Prague, 2012)、第 21 回 World Congress Social Psychiatry (Lisbon, 2013) で報告した。

本研究は上記の知見を基に発達障害圏学生に対して新しい不適応予防プログラムを開発し、修学支援の展開に必要な条件を求め支援の基盤形成を行うことが目的である。

3. 研究の方法

(1) 入学時健康診断で全員に自記式質問紙法 (University Personality Inventory: UPI) を用いてメンタル不調の学生を選定する。選定した学生を呼び出し、発達障害が疑われる学生においてはさらに AQ, ASRS を実施し、カットオフ値以上の学生に対し半構造化面接を施行、支援対象学生 (発達障害圏学生) を選定する。

(2) 静岡大学保健センターが 2004 年から 2016 年までに介入した発達障害圏学生の事例分析、及び教職員への質問紙を用いた発達障害圏学生の学内不適応状況について包括的調査をする。これらの調査により問題となる修学環境と当事者の障害特性を明確化し、支援のための基礎資料を作成する。

(3) 発達障害圏学生を対象に、上記基礎資料をもとに不適応を起こしやすい状況を特定し、認知行動療法の技法を取り入れたプログラムを作成し、グループ単位で社会的アクティビティと併せて施行する。また様々な評価尺度を用いて心理的適応状況がどのように推移するのか縦断的分析を行い、発達障害圏学生の修学適応状況がどう変化するのか検証する。

具体的にはグループワークに参加する前の単位取得状況、出席状況、機能の全体的評定として GAF スケール (DSM-) 等を用い、グループワーク参加後 3 ヶ月ごとにグループ参加状況と学生の修学状況・生活状況を種々の評価尺度を用いて解析する。

(4) 2 年間の縦断的データを解析し、発達障害圏学生が不適応を起こしやすい状況に特化した認知行動療法の有効性を検証する。

このプログラムの総合的有効性を判定するため、評価尺度だけではなく、グループワークに関わった精神科医・カウンセラー・看護師・ピア・サポーターとの協議により、個々の学生について行動上の問題が解決したかどうかや精神的健康度、社会参加意欲、学習意欲などを包括的に評価・分析する。

4. 研究成果

(1) 事例分析について

2004年4月から2016年3月の期間保健センター精神保健部門利用者の中で 大学入学後発達障害と診断された学生、 2016年3月までに卒業もしくは退学した学生、以上2つの条件を満たす35名を対象に調査した。調査の結果約17%の学生が大学入学前(小学校~高校時代)に不登校を経験していたこと、約3割の学生が大学入学前にいじめの経験があったこと、8割の学生が留年・休学を経験していたこと、約6割の学生が卒業に至っていたこと、約半数が大学1年時にすでに不登校などの状態となっていたこと、大学入学後修学不適應状態の顕在化から保健センターや外部医療機関受診までに平均1.8年の期間があること等が判明した。

(2) 対象者選定について

2017年4月入学後新入生健診時1181人にUPIを実施(1094人回収、回収率92.6%)そのうちメンタル不調が疑われ呼び出した学生は55人、うち27人(49%)にAQ, ASRSを実施し、カットオフ値以上の学生に対し半構造化面接を実施、発達障害圏学生を同定して同意を得た学生に対してプログラム参加学生とした。

2018年4月入学後新入生健診時1219人にUPIを実施(1121人回収、回収率92.0%)そのうちメンタル不調が疑われ呼び出した学生は51人、うち26人(51%)にAQ, ASRSを実施し、カットオフ値以上の学生に対し半構造化面接を実施、発達障害圏学生を同定して同意を得た学生に対してプログラム参加学生とした。

2019年4月入学後新入生健診時1201人にUPIを実施(1154人回収、回収率95.6%)そのうちメンタル不調が疑われ呼び出した学生は53人、うち25人(47%)にAQ, ASRSを実施し、カットオフ値以上の学生に対し半構造化面接を実施、発達障害圏学生を同定して同意を得た学生に対してプログラム参加学生とした。

(3) プログラム実施・有効性の検討について

2017年10月から2019年3月までの2.5年間で5クルールのグループワークを実施し、12名の学生が参加した。1クール12回のセッションで8回以上参加した学生は8人で完了群とした。残りの4人は平均1.5回の参加であり脱落群とした。脱落の理由はバイトの時間と重なる1名、サークル活動と重なる1名、なじめない1名、不明1名(連絡が取れない)であった。プログラムに参加できなくともバイトやサークル活動に参加できるのであれば特段問題ないと考えられる。なじめないと返答した学生においては個人面談とした。完了群8名においては不安感、抑うつ感の改善が認められその結果については Yuko Furuhashi The effect of group therapy for Japanese university students with high-functioning ASD and ADHD. 19th World Congress of Psychiatry、 Yuko Furuhashi Evaluation of small group therapy for Japanese university students with High functioning ASD. 18th International congress of European Society of Children and Adolescent Psychiatry、 Yuko Furuhashi An effective intervention for Japanese University Students with high-functioning ASD 4th International Congress of Clinical and Health Psychology on Children and Adolescents、 Yuko Furuhashi Group therapy for university students with high-functioning ASD 17th World Congress of Psychiatry で報告した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yuko Furuhashi	4. 巻 3
2. 論文標題 A study on the mental health of Japanese university students by the University Personality Inventory	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Annals of Epidemiology and Public Health	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Furuhashi	4. 巻 44
2. 論文標題 Unexpected effect of Zolpidem in a patient with attention deficit hyperactivity disorder	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian journal of Psychiatry	6. 最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ajp.2019.07.012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Furuhashi, Sumiko Satomura	4. 巻 10
2. 論文標題 Sleep related eating disorder as an unexpected effect of zolpidem	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Neuroscience and Medicine	6. 最初と最後の頁 75-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4236/nm.2019.102005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古橋裕子、加治由記、松本百合子、野上愛里子、山本裕之	4. 巻 57 (1)
2. 論文標題 健康診断を利用した多職種チームによるメンタルヘルス支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 229-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加治由記、森敏明、古橋裕子、松本百合子、野上愛里子、山本裕之	4. 巻 57(1)
2. 論文標題 静岡大学における感染症対策について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 198-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高山佳子、山本裕之、古橋裕子、松本百合子、野上愛里子、加治由記	4. 巻 57(!)
2. 論文標題 男子大学生の4年間の大学生活における健診データの経時的動向と生活習慣要因との関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 77-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋裕子、里村澄子、加治由記、松本百合子、野上愛里子、石神直子、森俊明、山本裕之	4. 巻 56(1)
2. 論文標題 保健センタ で診た大学入学後に顕在化した発達障害圏学生について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 403-404
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内藤有美、山本裕之、古橋裕子、加治由記、松本百合子、野上愛里子、石神直子、森俊明	4. 巻 56(1)
2. 論文標題 学生健康診断時に蛋白定性検査とクレアチニン補正を同時実施する意義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 102-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森俊明、加治由記、古橋裕子、松本百合子、野上愛里子、石神直子、山本裕之	4. 巻 56(1)
2. 論文標題 学生健診におけるカルシウム代謝異常の頻度と種類についての検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 149-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石神直子、森俊明、古橋裕子、加治由記、松本百合子、野上愛里子、内藤有美、山本裕之	4. 巻 56(1)
2. 論文標題 インフルエンザと生活習慣の関係の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 288-290
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋裕子	4. 巻 56(1)
2. 論文標題 発達障害学生の大学における支援の現状と今後の課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東海・北陸地方部会報告書	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田裕一、山本裕之、古橋裕子、加治由記、松本百合子、野上愛里子、石神直子、森俊明、内藤有美	4. 巻 56(1)
2. 論文標題 タブレットを持ち込むことの影響について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 386-387
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Furuhashi	4. 巻 1
2. 論文標題 An effective intervention for university students with autism spectrum disorder.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 aitana research	6. 最初と最後の頁 125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古橋裕子、里村澄子、加治由記、松本百合子、森俊明、山本裕之	4. 巻 55 (1)
2. 論文標題 UPIで見た新入生、4年生、大学院生の比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 358-359
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上愛里子、加治由記、森俊明、古橋裕子、山本裕之	4. 巻 55 (1)
2. 論文標題 大学教職員を対象としたストレスチェックにおける集団分析方法の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 433-435
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森俊明、古橋裕子、加治由記、松本百合子、野上愛里子、山本裕之	4. 巻 55 (1)
2. 論文標題 インフルエンザの易感染性因子についての検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 217-218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Furuhashi, Shusuke Furuhashi	4. 巻 1
2. 論文標題 Group therapy for university students with high-functioning autism spectrum disorder	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 WPA XVII WORLD CONGRESS OF PSYCHIATRY	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田裕一、太田祐子、古橋裕子、松本百合子、野上愛里子、森俊明、山本裕之	4. 巻 55 (1)
2. 論文標題 心理職による集団アプローチを活用した学生相談と障害学生支援の連携について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 290-292
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Yuko Furuhashi
2. 発表標題 Evaluation of small group therapy for Japanese university students with High functioning ASD
3. 学会等名 18th International congress of European Society of Children and Adolescent Psychiatry
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Furuhashi
2. 発表標題 The effect of group therapy for Japanese university students with high-functioning ASD and ADHD.
3. 学会等名 19th World Congress of Psychiatry
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古橋裕子、里村澄子、加治由記、松本百合子、森俊明、山本裕之
2. 発表標題 健康診断を利用した多職種チームによるメンタルヘルス支援
3. 学会等名 第57回全国保健管理研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Furuhashi
2. 発表標題 An effective intervention for university students with autism spectrum disorder.
3. 学会等名 4th International Congress of Clinical and Health psychology on children and Adolescents (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古橋裕子、里村澄子、加治由記、松本百合子、森俊明、山本裕之
2. 発表標題 保健センタ で診た大学入学後に顕在化した発達障害圏学生について
3. 学会等名 第56回全国保健管理研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 (座長)古橋裕子
2. 発表標題 発達障害学生の大学における支援の現状と今後の課題
3. 学会等名 第56回全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuko Furuhashi
2. 発表標題 Group therapy for university students with high-functioning ASD
3. 学会等名 17th World Congress of Psychiatry (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古橋裕子、里村澄子、加治由記、松本百合子、森俊明、山本裕之
2. 発表標題 UPIで見た新入生、4年生、大学院生の比較
3. 学会等名 第55回全国保健管理研究集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Yuko Furuhashi (Andres Costa, Eugenio Vilba 編著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Nova Science Publishers	5. 総ページ数 212ページ
3. 書名 Horizons in Neruoscience Research (Chapter 4 担当)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----